

遼寧省文物考古研究所との共同研究

奈良文化財研究所と中国・遼寧省文物考古研究所は、1996年の友好共同研究の締結以来、20年以上にわたって継続的に共同研究を進めてきました。この間、「東アジアにおける古代都城遺跡と保存に関する研究」、「3～6世紀日中古代遺跡出土遺物の比較研究」、「朝陽地区隋唐墓の整理と研究」、「遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究」の4つの研究課題に取り組み、古代日中の文化交流に関する研究成果を国内外に広く公表、発信してきました。

本年度からは、「三燕文化出土遺物の研究」と題する新たな共同研究に着手しています。その一環として、6月24日より7月1日まで、李竜彬副所長をはじめ4名の方々を日本へ招へいしました。今後4年間の共同研究の進め方について協議するとともに、日本の関連資料や遺跡、文化財の保存・活用状況等を視察していただきました。また、李副所長による所員向けの講演会を開催しました。多くの研究員が、「遼陽市で新たに発見された河東新城後漢壁画墓とその関連する問題について」と題する講演に耳を傾けました。

河東新城後漢壁画墓は、マンション建設に際して不時発見された後漢末期の壁画墓で、墓室入口部の壁面に被葬者とみられる人物をめぐる饗宴の場面や、馬、牛耕、牛車等を描いた壁画が遺存していました。質疑応答では、墓の構造や壁画の内容に対する解釈、壁画の保存方法に議論がおよび、高松塚古墳・キトラ古墳の調査と保存に携わる奈良文研にとって、たいへん有意義な講演会となりました。

10月には、奈良文研の研究員が遼寧省を訪問し、日本の古墳文化にも大きな影響を及ぼした三燕文化の出土遺物を調査する予定です。今後も両研究所の学術交流の発展にご期待ください。

(都城発掘調査部 廣瀬 覚)



講演会の様子－李竜彬副所長(右)

文化財写真技術研究集会の開催

家庭の写真やSNS等で気軽に共有でき、一般用途には広く普及しているデジタルカメラ。写真の楽しみも広がっています。そのような時代ですが埋蔵文化財調査の記録写真では、現在でも遺跡のすがたを確実に保存するためにフィルム写真が使われています。しかし年々縮小する需要がその周辺環境におよぼす影響も大きく、フィルムの入手困難や保存性の低下等が進んでいます。

こういった状況を鑑みて、2017年3月末に文化庁より「埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について 1」という報告が出されました。これは全国の埋蔵文化財調査機関向けに、フィルム写真の品質や保存性を確保しながら積極的にデジタル写真の技術を導入する指針を示した報告で、奈良文研の写真室もこれまで培ってきた技術と、近年試行してきたデジタル技術を提供しています。

この報告内容を写真室が中心となって実施している「第8回文化財写真技術研究集会」(7月7日開催)において、文化庁より近江俊秀調査官をお招きして講演会を実施いたしました。

当日は参加者100名を超え、参加者の関心の高さがうかがえる研究集会となりました。近江調査官の講演に続き、報告をまとめるにあたり専門委員となった各氏をまじえて意見交換会も実施し、具体的な機材の指針や保存に関する方法論等活発な意見交換がおこなわれました。

報告や研究集会を経て、埋蔵文化財記録写真分野でも積極的にデジタル技術が導入されることとなりますが、技術・保存の面でまだまだ抱える問題もあり、今後も文化庁と写真室・研究会が全国の埋蔵文化財調査機関をサポートするために、研修会や講演会の開催等を実施していく必要があります。

(企画調整部 中村 一郎)



研究集会における近江調査官の講演